
中国民族学における文化研究が現在直面している基本的問題

周星

<愛知大学>

要旨

中国民族学、特に少数民族研究では、現在の基本的研究パラダイムは依然として一種の「民族別」研究である。本論では、このようなパラダイムの由来、根拠、既存の問題およびその刷新の可能性について検討した。中国の文化問題を検討する際には、研究者は現代中国の国家レベルにおける「一体化」と各民族および各地域社会の「多様性」の間に存在しているであろうあらゆる関係の複雑性を明確に意識しなければならないと筆者は見なしている。国民アイデンティティと一体化は、中国各民族人民の共有する文化と文明の成長および関連要素の絶え間ない拡大を意味しており、一方多様性は、各民族、各地域社会或いは様々な共同体の文化的伝統の存続と再生を意味している。

キーワード 中国民族学、少数民族文化、研究パラダイム、一体化、多様性

「民族」と「文化」の視点から現代中国社会の理解を試みるという学術的テーマについて言えば、民族学(文化人類学)は最も軽視できない学問であるだろう。しかし中国民族学、特に少数民族研究については、その現在の研究パラダイムは依然として主に「民族別」研究となっており、「民族別」式の民族研究と文化研究は、中国文化における「民族別」の側面から見出せる多元的状况を提示するのに有効ではあるが、同時に中国文化におけるその他の側面や特徴の軽視を招くという注意すべき問題が潜んでいると筆者は見なしている。これに関連して、現代中国の「国民文化」建設や地域、民族(エスニックグループ)、市民および大衆文化などの様々な形態の多様性の関係という問題、更にはこれらの関係の将来的な発展方向の問題などに中国民族学が如何に対処するかという点については、未だに意余って力足らずの感がある。これらのことから鑑みて、本文では主に民族学における文化研究が現在直面している上述の基本的問題を考察することとする。

一、「中華思想」と蔑視されてきた少数民族文化

少数民族文化と中国文化の関係という問題を考察する際には、いわゆる「中華思想」の影響について触れないわけにはいかない。「中華思想」の概念¹について簡単に述べれば、それは主に文化上の中国中心主義或いは中国ナショナリズムを指している。国内の漢民族と少数民族の間の問題を指す文脈や背景の中で用いられる際には、それは一種の華夏或いは漢民族中心主義とし

¹ ここで用いられる「中華思想」という言葉が、文化上の中国中心主義或いは漢民族中心主義を適切に表現するものであるかどうかについては依然議論の余地がある。この他にも、字面だけを見てこれを本文で取り扱う「中華民族」或いは「中華思想」と同一視して解釈すべきではない。

ても理解される。多くの学者によって指摘されているように、「中華思想」のような自民族中心主義の理念は、人類の様々なエスニックグループやコミュニティの中に極めて普遍的に存在しており、中国人或いは漢人に特有のものではない。しかし古代中国、特に漢民族社会が「天下」を宇宙とし、華夏中原を世界の中心と見なす東アジア文明の中に、余りにも長期に渡って身を置いていたため、中国の「中華思想」は内外区分の典型的思想としての性格を強くした。

「中華思想」によって形成された「天下」構造の中では、「天子」の統治が及ぶ地方は「化内」とされ、それが及ばない地方は未開の「化外」の地とされた。このような構造の中においては、華夏中原の人々が最も高度な文明と文化を有しており、中原からの距離に伴って文明と文化の水準も少しずつ下がると見なされ、いわば文明と文化の水準は中原からの空間的距離によって決定されると見なされていた。これは中心と周辺、華夏と辺夷(つまり「華夷観」)によって構成され、帝王による「徳化」が四方に広まり、辺夷の求心力がそれに「慕化」することによって形成される理想的な世界秩序であった(参考王柯, 2001:5-56)。それはある意味において一つの同心円的秩序の漸進的拡大の構図として描き出すことができる。

まさに一部の研究者が明確に指摘するように、「天下」構造或いは「中華世界」においては、中原文化は自らが中心であるという優越感に満ちてはいたが、基本的に文化的に如何なる種族や民族も排斥することは無く、却って全ての「慕化」された辺夷に対して両腕を開いて迎え入れたのである。古代中国の封建主義的イデオロギーが「中華思想」を通じて構築した文化(礼儀)秩序は、上述のような方式を通じて少数民族を永遠に文「化」の外に排除することを目的としたのではなく、それとは正反対に彼らをできる限り文「化」の内へ吸収しようとしたものであったと言える。しかし率直に言えば、別の側面においてこのような中華思想の理念の中には、非漢民族或いはそのコミュニティの文化に対する無視、軽視ひいては蔑視さえも確実に含まれていた。

明らかなこととして、「中華思想」を含む封建主義的イデオロギーが長期的に主流或いは支配的地位にあった古代中国においては、中国文化に対する少数民族の生活様式や文化創造のうえでの貢献が実際には非常に多岐に渡っていたにも関わらず、少なくとも20世紀初頭に至るまで基本的にそれらが承認されることはなかったのである。実際に、「中華思想」の文脈においては少数民族が文化の創造力を備えているかということについても往々にして否定的或いは懐疑的であった。

このような少数民族文化を蔑視する傾向は、「辺夷」や「化外」の民に関する中国古典の記載や記述の中に如実に反映されていた。正史の辺夷伝或いは文人学士の紀行文や民謡の収集録などにしても、辺夷の変わった風習や習俗は古代中原の人々の注目を大いに集めたが、多くの場合その作者達は、彼ら辺夷と「中華」或いは中原の距離もしくは差異の程度によってそれらが「礼儀」と文化を備えているかを判断する傾向にあった。当然、古代中国の周辺少数民族に対する認識は「桃源郷」といった類のイメージとなりがちであったが、その中の一部の具体的事実に対する認識には全く価値が無いわけではなく、また「夷を以って夷を制す」という辺境統治や王朝が「理藩」を実施する過程においては、「辺夷の制度」を尊重する思想や態度も見られた。しかし「中華思想」の影響から少数民族文化に対する誤解、ひいてはその否定といった態度は、より恒常的に存在していたのである。

このような状況は19世紀末から20世紀初頭まで、東アジアを「天下」とする世界秩序が根底

から瓦解するまで続き、「中華思想」はかつてそれが「夷狄」と見なした列強の侵略によって致命的な衝撃を受けた。これと同時に、中国の各民族間の関係も根底からの再構築という全く新しい時代に足を踏み入れた。しかし、かつて重大且つ長期的な影響をもった伝統的イデオロギーとしての「中華思想」の遺産が完全に死滅したわけではなく、例えば 20 世紀前半の中国民族学においてさえ、「中華」中心主義意識が一定のレベルで表れていたように、それは常に何らかの影響をおよぼしていたのである（王建民、1997:320）。

二、「民族別」パラダイムの民族学：「民族」を「文化」の境界線とする傾向

20 世紀初頭に成立した中華民国では、「三民主義」を基本的イデオロギーとして、国家レベルにおいて国民国家の建設と「中華」民族アイデンティティの促進という非常に困難な道を歩みだした。列強が中国を虎視眈々と狙う国際環境において、国内の各少数民族を含む中国人は声と姿を一つにして国際社会に踏み出し、中華民族（ここでは中国国民とほぼ同義である）の凝集力を強化しなければならなかった²。これは「三民主義」の原則における「民族主義」の基本的精神でもある。しかし一方で国内には少数民族問題が実際に存在しており、列強による中国分割の企みが激しさを増す中でそれは更に顕著なものとなった。このような状況にあって、国内的に「五族共和」による漢、満、蒙、回、蔵の諸族平等、共同での外国侵略への抵抗が追求されたことによって、国内的な民族関係と民族政治に新たな現象が生まれ、これに呼応して少数民族の国家にとっての意義、彼らの文化創造の中国文化への貢献といった問題も次第にタイムリーなテーマとなっていった。

新中国が成立したことによって 1950 年代には、民族の団結、進歩および民族間の平等な関係は基本的な国策となった。全国的な社会主義運動が統一的行われ、次第に少数民族の社会民主改革もその議事日程に上りだした。少数民族地域の社会改革を進め、基本的な民族団結の維持を図るためには、それと同時に各民族の平等な権利を十分且つ基本的に保障できる国家体制を打ち立てなければならず、このため政府は、少数民族言語大調査、少数民族社会歴史大調査および「民族識別」などの大規模な政治的、学術的活動を相次いで実施した。中華民国時代と異なるのは、共産党員が中国の政治構造に重大な影響をおよぼす満、蒙、回、蔵といった大民族だけでなく、人口の比較的少ない少数民族も重要視していたことであった。

このような「民族識別」は、政策決定およびその後の族籍管理を通じて「民族」という身分制度を更に強化するという性格を含んでいたため、少なからず批判を受けもしたが、複雑な民族識別のプロセスを経て最終的に認定された 55 の少数民族は、現代中国政治構造の重要な側面を構成し、また「民族区域自治」の基本的根拠ともなったのである（周星、1993:281-287）。これと同時に、政府は国民国家建設プロセスに少数民族を組み込むための努力の中で、少数民族の国家にとっての意義、少数民族文化の祖国文化に対する貢献、かつての少数民族の蜂起や抵抗が中

² 厳密に言えば、清末以来絶えず繰り広げられた「中華民族論」は古代中国の「華」、「夷」の分類と全く関係が無いとは言えないが、それは基本的には全く新しい国際環境における中国人の自己アイデンティティの発現プロセスであった。おおよそ国民党は中華民族を漢人と漢化した人々と見なす傾向にあり、共産党は各少数民族を含む集合体と見なしており、これらは共に中国国内の全ての人を指していた（松本真澄、2003:3-10）。本文では基本的に費孝通教授の定義に基づき「中華民族」の概念を用いているが、それを今まさに形成されつつある「中国国民」の集合体としても見なしている。

国革命の重要な側面となることなどの承認を徹底して行い、中国の新たな政府イデオロギーの重要な構成要素の一つとしていった。この間「階級」が「民族」の問題に取って代わる或いは「階級」が「民族」を否定する(加々美光行、2004)という時期もあったが、少数民族文化を中国文化の重要な構成要素とする理念は基本的に維持および継続された。

少数民族文化の独自性と価値、少数民族文化の祖国文化に対する貢献、祖国の歴史発展における少数民族の功績とその地位を認める全く新しい民族観と文化観は、正史学を中心とする伝統的国学に大きな衝撃を与えた。これは1950年代以降の中国人文社会科学研究における最も革命的な変化の一つと言える。中国民族学では早くも1950年代以前に多くの実証的調査と研究を通じて、中国文化のエスニックな多様性と地域的多様性に関して既に極めて深い認識があった。50年代から今日に至るまで、少数民族社会と文化の独自性を重視し、少数民族文化を中国文化の一部として見なすことは、次第に民族学の専門的学術分野だけでなく、社会大衆の一般的認識においてさえも一種の「常識」となっていった(陳連開、1983: 宋蜀華、陳克進、2001:96-110、147-156など)。

民族識別や少数民族社会歴史大調査などの実践に基づき、『中国少数民族語言簡志叢書』、『中国少数民族簡史叢書』が出されたのに続き、様々な「民族別」の記述を特徴とする「少数民族史」、「少数民族文化史」、「少数民族文学史」、「少数民族風俗誌」などが雨後の筍の如く現れた。これはつまり、進化論に基づく「社会形態民族学」がある一方で、「民族」を単位とした歴史、文化および民族誌の描写が、中国民族学のもう一つの顕著な特徴となったことを示している。また一方で、これらの「民族別」式の著述は、各少数民族の文化の創造性に対して肯定的評価を与えたものであり、中国文化のエスニックな側面に表れる多様性とその豊かさをより一層明確に示すものでもある。しかし次第に、例えば「民族」によって全ての「文化」的事象を定義する傾向や多民族による共同の歴史を各民族別の歴史へと分割する傾向、民族およびその文化の「固有性」と「純粋性」を過度に追求する記述といった「行き過ぎ」の問題も現れた。

文化の創造、伝承、発展は多くの場合、他でもなくエスニックグループ或いは共同体に基づき実現されるものであるが、同時に文化は密接な民族間の族際的相互関係と交流の中でその普遍性を存続、発展および実現させるものでもある。文化の本質は交流のプロセスの中で蓄積するため、エスニックグループを越えた文化の拡散と融合は、その世代間の継承以上に重要である。「民族別」を最優先する現在の論述の枠組みにおいて、林立した民族はそれぞれ独特の歴史と文化を保持してはいるが、その歴史と文化の他の民族との関連性はむしろ極めて軽視されている。このような傾向が一つの風潮となるプロセスにおいて、大部分の本来地域的で、エスニックグループを越える各民族に共通の文化的事象は、支離滅裂なまでに引き裂かれ、孤立した各民族別の歴史と民族別の文化体系の欠片となってしまい、同時に、各民族の支系レベルの差異や文化的特徴は、「民族別」単位の枠組みの中で消滅或いは「均質化」されてしまった。

我々が「民族別」を枠組みとした中国民族学の歴史および文化叙述のパラダイムに対して疑問を投げかけるのは、既にこのような思考の延長線上に「学問上の理論」では容易に理解或いは説明し難い結果が益々多く現れているからである。竹楼をある民族の固有の文化的要素とし、風雨橋をある民族文化独自の象徴とし、洞経音楽が「ある民族の古楽」と定義される……といったように、元来多民族に共有の基本的事実であり、同時に地域文化的要素としての意義をもつ

たそれらは、全てその意義を失ってしまった。「民族」は極めて多くの場合絶対的に「アプリアリ」な存在となり、任意に各種の文化的要素に裁断され、それらを繋ぎ合わせて再構築される個々の「枠」となってしまう。ひいては、「民族別」の歴史を無限に遡ったり(例えば猿人時代にまで)、ある文化の「発明権」を争ったり、ある古代地方政権および少数民族地区に関する考古学的文化の民族的帰属を論争したりといった具合に、「学術」名義の下に出された多くの見解は、実際には既に学術研究の基本的精神から外れてしまっていてさえいる。「民族」を単位として定義して「文化」の境界線を定め、「歴史」を記述し、その文化の「固有性」、「優越性」および「純粋性」やその歴史の「独立性」などを強調する姿勢が頂点に達した時こそ、中国民族学がこのような「民族別」式の研究或いは叙述のパラダイムを反省しなければならない時である。

中国文化に関する主流となっている見解において、かつて長期に渡って少数民族の文化価値およびその貢献といった視点が欠如していたという歴史があるため、「行き過ぎた是正」といった傾向のあるエスニックグループや民族を背景とした文化に対する見解が一部に存在することについて、我々はある程度の理解を示すべきかも知れない。しかし、民族学の学術研究自体はこのような傾向の持続的蔓延を受け入れるべきではない。大部分のこのような文化に関する見解の背後に程度は異なるもの一様に、そのエスニックグループの政治的立場を強化しようという共通認識が明確に見出されることは指摘しておかなければならないだろう。ある種特定の文化に関する見解によってエスニックアイデンティティを構築することは、本来むしろ極めて恒常的な現象であった。しかし、アイデンティティの構築とある種の利益強化のために文化史や民族史の基本的事実を歪曲させたとすれば、このような見解も民族学における学術的性格を備えているとは認め難いものとなる。中国では、かつての「民族識別」のプロセスにおいてこのような問題が明確に存在しており、現行の民族政策の指導下においても、「民族」という身分が政治化の傾向にあるため、「民族」によって「文化」を定義することから生じる学術的問題の更なる尖鋭化が引き起こされている。

三、民族学における文化研究の新たな可能性

1988年秋、費孝通教授は香港中文大学で「中華民族多元一体格局」と題する講演を行い、中国民族学界ひいては中国学術界全体に非常に大きな反響をもたらし、この講演は好評を博すと共に、一方では幾つかの重要な批判も受けることとなった(費孝通、1999[1988])。筆者から見れば、費氏の講演の意義は極めて多くの様々な方面から分析を行ったことにあつたように思われるが、その中国国民(つまりは「中華民族」)の「一体」性と各民族間の「多元」性の関係についての説明は、実際には、一つの国民国家としての現代中国にとって避けては通れない国民統合が未だに完成されていないという深刻な現状を反映しており、更には如何に国内少数民族の文化的個性を尊重しながら積極的に国民アイデンティティの形成を推進するかという大きな挑戦であると見なされたのである³。

中国の民族学について言えば、費孝通教授の「多元一体」学説の意義は、第一に中国の人類学者によって中国の複雑な民族の歴史と文化関係に基づき行われた長期的観察と研究を通じて、

³ 費孝通教授の「中華民族」の概念と前述の「中華思想」とは全く関係が無いことを指摘しておかなければならない。

長い歴史と複雑な文化を含む中国の多民族関係の解釈に適した「民族理論」が初めて提起されたことにある。1994年10月28日に人類学者喬健教授が香港中文大学で行った人類学講座教授就任講演において指摘したように、多民族が集まり共同で数千年の歳月を経てきたこの中国の構造に対しては、人類学者だけが全面的、客観的且つ系統的な解釈を提供することができる。この解釈は、第一に中華文化が多元性を備えると同時に共通性や個別性も備えるという特徴、第二に、エスニックグループ間を複雑に交錯する経済貿易、政治および文化の関係、第三に、このような共存共栄の大団結の構造を形成した基本的原因の分析とその結論という三つのレベルから構成される。喬健教授は、このような解釈と分析は高度な学術的価値があるだけでなく、高度な実用的価値もあると見なしており、中華民族の多元一体的構造に対する認識は、中国の教育が発達した後に、必ずや中高一般教育と大学専門教育における重要な一部分になるであろうと信じている(喬健、1995[1994])。多くの批判や改善点があるとは言え、費孝通の学説は現在我々が知り得る限り、中国の民族と文化の問題を全面的な解釈に用いることが可能な最も有力且つ広範な影響をもつ中心的理論であると言える(周星、1990；陳連開、1996)。実際に、中国の考古学、歴史学、文化研究の領域および国外において引き起こされた広範な関心、賛同および批判は、まさにこの点を示していると言えるだろう。

一部の中国民族学史を鑑みれば、中国民族学がかつて欧米、ソヴィエトロシアおよび日本の殆ど全ての民族理論や文化学説を大量に導入したことが容易く見て取れる。大量の翻訳やその紹介、選択、反論および消化を通じて学術的「本土化」を実践する中で、中国民族学は様々な外来の理論や学説を次第に自らの学術的財産の一部として吸収していった。しかし、それらは中国民族学の体系の中で、基本的に異なる各民族と文化的事象或いはその異なる側面の説明に実用主義的に用いられている。例えば、旧ソ連のマルクス主義民族理論を再解釈して中国の「民族」の定義に用い、進化論学説を中国の「社会形態民族学」の構築に用い、また中国の民族学或いは文化人類学の応用に理論的基礎を提供するために機能主義を用いたことなどが挙げられる(参考 顧定国、2000[1994]:81-100)。また、多くの人々が中国の資料や実例を用いて彼らが心酔する特定の欧米の理論に証拠を提供したり、何らかの補足や訂正を加えたりといったことを好み、またそれに得意になり、また或いはそれに満足するといったことは、さらに多く見受けられた。

費氏の「多元一体」理論の基となった主要な多民族の歴史と文化的事実の大部分は大多数の中国の民族学者が熟知していたものであったため(筆者が見るに、これこそまさに費氏の理論が尊重に値するものとされる点であり、この理論の包括性と解釈力を示している)、また同時に、費氏の「彼の中に我あり、我の中に彼あり」といった表現が浅はかであった(これもまた費氏の魅力溢れる文章の一節である)ために、かつて一部の評論家たちは「多元一体」学説を鼻であしらった。しかし筆者が見るに、このような態度はむしろ評論家たちの浅はかさを反映したものであった。このような論者たちは、あたかも材料は中国のものでも良いが、理論は必ず欧米のものでなければならぬ、外国人が提起したものではない或いは格式ばった学術用語を用いていなければ理論とは呼べないといった人々であった。中国の学者が中国社会や文化或いは民族や歴史に関する何らかの学説を提起する場合には、総じてある種の学術上の「隷属性」を心理的に抱えた人々が不安や不快感を覚えることとなる。しかし基本的に論争の余地の無いこととして、現在

に至るまで、欧米の「民族」の概念やエスニック理論を含め、如何なる理論も費氏の学説以上に適切に中国の多民族社会の歴史、文化および現実の構造を全面的且つ系統的に解釈できていないのである。つまり費氏の業績は、中国多民族社会の歴史と文化を認識する際の中国民族学の本土化された理論のもつ十分な可能性を見事に証明したのである。

本文のテーマに限れば、費孝通教授による多民族が密接な相互関係にある中国の歴史過程に対する詳細な解釈は、大部分の正史学者の述べる王朝変遷史とは大きく異なると言わなければならない。それと同時に、彼の中国各民族の歴史と文化に対する理解も、現在の中国民族学において既に一般化されている「民族別」式の方法とは大いに異なると筆者は見なしている。費孝通教授が特に強調しようとしたのは「歴史」の観点と「全体」的視点であり(喬健、1991)、彼によれば、もし多民族の歴史と文化の複雑に交錯した相互関係を無視したとすれば、単独のおよび独立した「民族別」の民族史或いは「民族別」の民族文化の解釈は大部分の意義を失うであろうと言う。このことから言って、費孝通教授の講演は実際に中国民族学が「民族別」の研究パラダイムを越えるための新たな方向性を提示したと筆者は見なしている。その後、一部の研究によって、「多元一体」理論は旧来の「民族別」パラダイムの民族史と民族文化の見解の中から派生したものであるとされた(例えば、覃彩靈、1995)にも関わらず、むしろそれは多くの新たな活力をもたらしたのである。と言うのも「多元一体」理論は基本的に、人種(血統)的、エスニックな或いは文化的な如何なる「固有性」や「純粋性」にも少しの余地も残していないからである。

費孝通教授本人を含め、誰も「多元一体」学説が既に完全無欠で自己完結的な学説であるとは見なしていない。一方で十数年来、この学説は一貫して学術界の検証と批判を受け入れ、継続的に更なる深まりと発展を見せた(西澤治彦、2002)。中央民族大学、北京大学社会人類学研究所および中国各地の民族学者たちは一様に、費氏の「多元一体」理論の更なる検証と深化に努めて来た⁴。上述の「民族別」の論述の枠組みを維持しながらも「多元一体」理論を導入した一部の研究の他に、「多元一体」は「民族教育」(藤星、1996)、「民族関係」(李建新、1996)や文化研究の極めて多くの専門的学術領域に益々多く用いられるようになってきている。

我々が北京大学で費孝通教授とこの理論に対する質疑と批判の討論を行った際には、非常に重要な以下の三つの問題が提起され、これらについては更に深く検討しなければならないだろう。

1、「民族」の重層性と「多重アイデンティティ」

費氏の理論に対する多くの批判は、「中華民族」の概念の政治的要素およびその56民族との関係を巡って展開された。費孝通教授は、「民族」の概念は重層的性質をもつと見なしており、その重層性は第一に「中華民族」内部の各民族の相互依存、相互促進、共同発展の関係、第二に「民族識別」を通じて認定された漢族と各少数民族の環境、歴史、経済生活および社会的、文化的伝統が全く同じではないということ、第三に民族内部の二次集団或いは支系から構成される。費氏の理論からは、多民族による中国の歴史の歩みが決して独立した各民族の歴史の単純な寄せ

⁴ この点での主な成果としては、費孝通主編『中華民族新探索』(中国社会科学出版社、1991)、陳連開著『中華民族研究初探』(知識出版社、1994)、費孝通主編『中華民族的多元一体格局(修訂本)』(中央民族大学出版社、1999)などを参照。

集めでは無く、多民族の密接な相互関係による「中華民族」形成の歴史であることが分かる。費孝通教授による「中華民族」の概念の再定義は、まさに一定のレベルにおいて各民族およびその支系の間或いは各民族間を越えて普遍的に存在する族際的現象と族際的事実とを包括的に指すものであると筆者は見なしている。(周星、1991)。

「民族」の概念の重層性に対する理解が、自然と「多重アイデンティティ」の問題へとおよぶことは明らかである。従来の「アイデンティティ」観には、人類集団の連帯意識を単純化および硬直化させて理解する傾向が見られがちであったが、中国のような複雑な多民族社会および中国のように長い多民族の歴史の中では、実際にそれぞれの具体的な族際的場面において存在し、そこで展開された「アイデンティティ」は、むしろ確実に更なる複雑化や多様化を見せたのである。海外華人、華僑の多重アイデンティティ、回族、朝鮮族、蒙古族、ナシ族といった国内少数民族の二重アイデンティティ、この他にも多くの「越境民族」の国家アイデンティティと民族アイデンティティの複雑な情況など、既存の多くの研究は一様に「多重アイデンティティ」の可能性を示している。少数民族或いはその支系のアイデンティティは、彼らの国家に対する政治的アイデンティティ(国民アイデンティティ)と必ずしも衝突するとは限らない。言い換えれば、彼らの「中華民族」(「中国国民」或いは「中国人」とほぼ等しい)に対するアイデンティティも、全く否定することはできないものである。

2、「族際的文化共有」

中国文化を研究する際には、我々は各民族の「多元文化並存」という基本的事実に注意しなければならないだけでなく、同時に中国の広範囲に渡って実際に存在している「族際的文化共有」という状況にも注意しなければならない。かつて文化について「民族別」式の偏った分類と論述が多くなされてきたため、研究者が多民族コミュニティ或いは地域における族際的文化共有という重要性を無視するということが頻繁に起きた。族際的文化共有という状況が普遍的に存在しているのは、他でもなく中国各地に多民族コミュニティが数多く存在していることに対応しているからであると筆者は見なしている(胡鴻宝 周星、1997)。仮に族際的文化共有という理念が無ければ、我々は永遠に「民族」を「文化」の境界線とする民族別式の民族学の限界から抜け出すことはできず、同時に「多元一体」を特徴とする「中華文化」を必然的に理解できないであろう。族際的文化共有は、必然的な「漢化」の方向性を意味するものでは決してなく、それは一層の参与性と普遍性を備えた「華化」となるであろうことは指摘しておかなければならない(周星、2003)。

「族際的文化共有」とは、主に二つの、それ以上の或いは多数の民族が共同で構成する一種の文化現象を指す。「ある民族から別の民族へ、そしてまた各民族へ、知識としてのものから体験として、そしてまた習慣として、といったように文化の共有はその範囲と程度における一つの発展プロセスをもっている。無数の類似したプロセスが雪だるまのように、風のように、或いは核分裂のように中国文化の内部で発生し、中国各民族の複雑に絡み合った文化関係を創り出し、中国各民族の入り組んだ文化の共有状況を構成し、中国民族文化の全体性を形成したのである」(高丙中、1999)。言うまでも無く、「民族別」式の文化研究のみを行うとすれば、広範囲に渡って存在する族際的文化共有という事実および現象を解釈することは不可能であり、更には

中国文化のこのような全体性を説明することも不可能である。陳連開教授が指摘しているように、「族際的文化共有」の研究を重視することは、中国民族学における「異を知る」から「同を求め」への転換であり、中国民族学の文化研究について言うのならば、この二点を共に考慮しなければそれが成功することはあり得ないのである(陳連開、1995)。

3、多民族地域の研究

中国の多民族社会とその文化についての研究を行う際には、費孝通教授のようなマクロ的理論をもった視野が必要であると同時に、「民族別」文化研究やエスニックグループを越える共通の文化的事象の専門研究などを含むミクロ的および実証的研究が数多くなされることも必要である。しかし一方で費氏の理論は、多民族地域についての研究が現在特に必要であることを我々に啓発している。これは多民族から構成される中国社会とその文化が、実際には数多くの大小様々な規模の多民族地域によって構成されているからであり、地域が異なればその多民族の構成状況およびその文化共有の状況もまた全く異なるからである。「多元一体」理論は中国社会と文化の構造を理解する枠組みを示したとは言え、中国社会と文化の深層と細部を更に詳細に認識することは必要であり、そのためには多民族地域に関する研究を無視することはできない。

多民族地域の研究は、現在非常に盛んである「族際」モデルの限界性を確実に越えることのできるものである。ある特定の多民族地域内においては、研究者は各民族或いはエスニックグループ単位の独自の文化を観察することができるだけでなく、環境と生業に基づく地域的な文化要素および文化における族際的相互関係によって広範囲に渡って生じた文化共有という基本的事実も容易に見出すことが可能となる。このことは、より正確な多民族による中国社会とその文化を我々が更に正確に理解する手助けになると同時に、このような多民族地域の研究は、費氏の理論では不可能であった或いは欠如していた部分を更に検証し、深化させることのできる学術的ステップともなるであろうことを筆者は信じて疑わない。

中国の多民族関係と民族問題を単純化させたよく見られる傾向として、例えば「漢民族」と「非漢民族(少数民族)」の対立の構図が挙げられる。全国的な構造から見れば、漢民族の少数民族との関係には確かに主導的な性格があるが、幾つかの多民族地域の実証的研究を通じて、より複雑で多岐に渡る状況を明らかにすることが可能となり、そこから見出せる少数民族同士の政治、経済および文化の関係もまた無視できない重要性をもっている。ある地方の族際社会においては、漢民族ではなく少数民族によって当地の社会と文化の発展がそれぞれ主導されているといったことがよく見られる。例えば、麗江盆地のナシ族が当地の多民族地域社会において發揮している主導的役割は、決して漢民族に劣らない。また臨夏回族自治州では、基本的に回族が当地の政治、経済および文化を主導している。青蔵高原および周辺の幾つかのチベット地区でも、チベット族は漢民族を含むその他の民族、例えばトゥー族、メンパ族、ロッパ族および一部のチャン族、モンゴル族、ナシ族などに対して、多大な文化面における影響をおよぼしてきた。総じて言えば、多民族地域の研究は、研究者たちが中国多民族社会における「多重アイデンティティ」と「族際文化共有」の複雑さと現状を更に明確化し、理解するための大きな手助けとなっている。

四、グローバル化の波の中で成長する「国民文化」と持続的に変容する少数民族文化

中国国内における改革開放の不断の発展と国際的なグローバル化の波に伴い、中国の経済が持続的な高度成長を遂げつつあると同時に、中国各民族の社会と文化もまさに持続的で急激な転換と変容を遂げつつあり、いくつかの特に注目すべき社会的、文化的動向が相次いで現れている。

その動向としてまず、各民族或いはエスニックグループ、地域および方言集団を越える「国民文化」が持続的な成長を遂げ、これに呼応して国民統合に繋がる「国家アイデンティティ」の意識も次第に強化されていく。中国の国民文化の特徴は、第一に政府の主導によって促成され、愛国主義を中心的価値とするイデオロギーとしての性格をもつということ。第二に、現代中国語と標準語である「普通話」を基本的媒体としていること。第三に、テレビ、映画、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌などに代表される現代の電子メディアと印刷物メディアが益々大きな影響力を発揮していること。第四に、市場経済体制の確立によって国内各地域間および各民族間の経済交流と文化交流が促され、これまでに無い規模と程度においてそれらが持続的に発展したことである。またこれと同時に、全国的範囲で族際文化共有現象が益々注目されるようになり、特に政府が現代的メディアと各種の情報手段を通じて社会全体のコントロールをこれまでになく強化したことは、一定のレベルにおいて「国民文化」と「国家アイデンティティ」の構築を目指す中国の社会的傾向の発展と持続にとってかなり有利なものとなった。

第二の動向として、人々の地域アイデンティティと民族アイデンティティは依然として根強く存在しており、絶えず地方或いは民族文化の伝統の再生と新たな文化構築の実践的試みを通じて、様々な形式やシンボルを用いて新たな表現を探し求めている。時によっては、このような表現はより一層非常に強烈なものとして現れるであろう。地域や民族の間の経済発展格差は旧態依然として存在しており、ひいては拡大しさえもする状況において、地域文化と民族或いはエスニックグループの文化的アイデンティティもしくはその新しい表現の実践は、時として繰り返し現れる文化摩擦を招くこともあり、常に現実の利益との間に密接な関係を生み出す可能性をもっている。しかし、少なくとも物質文化のレベルと生活文化のレベルにおいては、少数民族の生活方式の変容には日増しに同質化する傾向が見られる(高丙中、1997)。これと同時に、国家によって「西部大開発」計画が積極的に推進されるプロセスにおいては、各地域と民族或いはエスニックグループによる新たな文化構築の努力もこれまでになく活発なものとして表面化するであろう(格桑頓珠、2004)。

第三の動向として、ここ数年来中国においては伝統文化の再認識と伝統文化への回帰、中国文化に対する自尊心の再構築という社会的傾向が広範囲に渡って持続的に現れている。「国粹」、「伝統」、「民間」および「民俗文化」などは、既に「社会主義」、「科学」および「現代化」といった政府のイデオロギー形態と鋭く衝突することは無く、益々多くの人々が両者の間には良性的相互関係と調和の可能性が確実に存在しているということを信じるようになってきている。特に「文化遺産(無形或いは非物質文化遺産を含む)」の救済と保護を巡る様々な社会的動向は、一般大衆の文化観念に明確な変化が生じたことを示しているだけでなく、中国政府の文化観と文化政策にさえも明らかな調整を生じさせている。

最後に挙げられる動向として、中国と国際社会の文化交流はこれまでに無く盛んなものとな

っており、欧米文化の影響と刺激を受けて、中国社会内には広範な文化の国際化現象が出現している。価値観の多元化を特徴とした、特に都市生活様式を中心とした「市民文化」、「大衆文化」および「流行文化」が全体的に隆盛し、その大部分は香港、台湾、韓国、日本などの東アジアの娯楽市場と互いに影響し合い、ひいては互いにリンクし、合流しさえする傾向にある。

要するに中国の文化問題を考察する際には、我々は現代中国の国家レベルにおける「一体化」と各民族および各地域社会の「多様性」の間に存在するであろう複雑な問題の全てを同時に意識しなければならないのである。国民アイデンティティと一体化は、中国各民族人民の共有する文化と文明の成分および要素の絶え間ない成長と拡大を意味しており、一方多様性は、各民族、各地域社会或いは様々な共同体の文化的伝統の存続と再生を意味している。このような多様性をもった文化様式或いはその伝統は、今日までの中国文化と中国文明における主要な表現形態であるだけでなく、国民が新たな文化と文明の更なる創造をなすための基礎であり、原動力でもある。多様性とは、各民族或いはエスニックグループが各地域社会と共有し一体化する傾向にある文化と文明の成長の基礎でもあるが、より重要なのは、それが各民族と各地域社会の人々の存在意義および生活上の幸福についての価値観にとって、必ずしも同一ではない定義を与えていることである。

本稿は、筆者が民族と文化の視点から観察した現代中国社会および文化の一側面を簡単に述べたものに過ぎず、また現在の中国における複雑且つ緊張感に溢れ、豊かで活力ある「多元一体」の文化構造に対する初歩的認識に過ぎない。もし本稿で述べた重大な課題をより理解し、研究しようとするれば、マクロ的視野と全体論的把握の他に、特にそれぞれの民族や地域および文化の側面から行った大量の実証的研究事例の蓄積が必要であり、このことは今後我々が継続して努力していかなければならない点であろうと思われる。

参考文献：

- 王柯 『民族与国家——中国多民族統一国家思想的系譜』 中国社会科学出版社 2001年
 王建民 『中国民族学史(上卷)』 雲南教育出版社 1997年
 松本真澄 魯忠慧訳 『中国民族政策之研究——以清末至1945年の“民族論”為中心』 民族出版社 2003年
 陳連開 『我国少数民族对祖国歴史的貢獻』 書目文獻出版社 1983年
 陳連開 『中華民族研究初探』 知識出版社 1994年
 陳連開 「中国民族研究的識異与求同」 『海峽兩岸中国少数民族研究与教学研討會論文集』 中国辺政協会(台湾)編纂・出版 1995年
 陳連開 「費孝通教授六十年學術研究給予的啓示」 『中央民族大学学報』1996年第6期
 宋蜀華、陳克進主編 『中国民族概論』 中央民族大学出版社 2001年
 費孝通主編 『中華民族研究新探索』 中国社会科学出版社 1991年
 費孝通主編 『中華民族多元一体格局(修訂本)』 中央民族大学出版社 1999年
 顧定国(Guldin, G. E.) 胡鴻宝、周燕訳 『中国人類学逸史——從馬林諾斯基到莫斯科到毛沢東』(The Saga of Anthropology in China: From Malinowski to Moscow to Mao) 社会科学文献出版社 2000年
 高丙中主編 『現代化与民族生活方式的變遷』 天津人民出版社 1997年
 高丙中 「中国現当代的文化重構与族際文化共享」 南寧市社会科学院編 『面向21世紀的民族民間文化』 『民族芸術』1999年増刊
 周星 『民族政治学』 中国社会科学出版社 1993年

- 周星 「關於『中華民族多元一体格局』的學術評論」 『北京大學學報』 1990年4期
- 周星 「黄河上游地区多民族格局的歷史形成」 費孝通主編『中華民族研究新探索』 中国社会科学出版社 1991年
- 周星 「『華化』・グローバル化と文化の自発的な動き——今日における中国少数民族文化の現状と動向——」 『激動する世界と中国——現代中国学の構築に向けて』（愛知大学2003年度国際シンポジウム報告書） 愛知大学 2004年
- 加々美光行 「中国の民族政策をめぐる新思考：『族群』『自治と共治』——内モンゴル自治区を中心に」 愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.19 風媒社 2004年
- 喬健 「論費孝通社会研究的方法」 費孝通主編 『中華民族研究新探索』 中国社会科学出版社 1991年
- 喬健 「中国人類学發展的困境与前景」 『廣西民族学院學報』 1995年1期
- 覃彩鑾 「壯族傳統文化多元一体格局及其原因」 『廣西民族研究』 1995年第2期
- 西澤治彦 〈文献紹介〉 「費孝通著『中華民族の多元一体構造』」 『武蔵大学総合研究所紀要』 No.11 2002年
- 藤星 「中国少数民族双語教育研究の対象、特点、内容和方法」 『民族教育研究』 1996年2期
- 李建新 「新疆維漢關係的調查研究」 『西北民族研究』 1996年第1期
- 胡鴻宝、周星等 「人類学本土化与田野調查——元江調查四人談」 『廣西民族学院學報』 1998年1期
- 格桑頓珠 「少数民族的現状与可持續發展的政策」 波平元辰、車志敏編著 『雲南的“西部大開發”』 中国書店 2004年